ビブリア

発行　いわき市平上荒川字長尾３０
福島工業高等専門学校
編集　図書委員会　ビブリア編集部
平成１０年２月１８日

福島高専図書館報　第８４号

巻　頭　言

大学教育と高専教育の狭間にて

第一に、教育も科学の進展と同様に時々刻々変化していることを念頭に置かねばならない。すなわち、「ゆく川の水の流れが留まらず絶えず動いているが如く」。同時に、教育も研究も普遍的であらねばならない。

以上のことを前提に、高等教育機関である高専教育も大学教育も理想を云えば同じであってしかるべきである。高専における三十余年以前の建学精神はその様であったと考えるなら、それが今は昔の物語であっても、はたまた新高専教育が既に始まりつつあると解釈してもよい。

教育とは、水の流れの如く単純に高い所から低い所へと云う訳には行かないことくらい、教育現場で働く一人として判っていても悩むことばかりである。特効薬はなく、たゆまぬ努力と情熱を持って行うほかない。そして、いかに学生に知的好奇心を満足させるよう、意欲を持たせる配慮をするかでもある。学生側にも云えることは、自発的にそれらを受け止めようとする情熱と心構えが必要でもある。

大学教育では、単位制で教官による一方通行的授業が多く、主として、教官の得意とする専門分野の教科による授業を行い、その内容は多分に学会等で講演したり、論文集に投稿したりすることによって評価されている成果を含んでいることによる。

さて大学教育の単位制という枠の中では、逆に学生の方から授業内容や教官を選択する自由度を持つことができる重要な制度とも考えられる。カリキュラムやシラバスを含め、学生による教官の評価となり、個々の教官は自分の授業に対しとても深刻に受け止め、如何に授業が手抜きでないかを良く理解しているはずである。特に卒業研究の発表会では、教官相互で厳しく研究成果の評価と指導能力が問われる修羅場でもある。

大学生自身も日頃の行動にはおのずと責任の取り方は判っており、主体性をもって勉学に励んでいる姿が浮かんでくる。

高専の学生諸君、大学生と高専生の本質的違いは何であるか考えてみてはどうか。そうすれば高専生活も変化するかもしれませんよ。

《機械工学科教官　亀井　秀也》

目　次

巻頭言（亀井　秀也）　……　1
感想文コンクール最優秀作品　……　2
新刊書の紹介　……　4
卒業生による「私の推す一冊」　……　5
図書館便り　……１４
お知らせ　……１５

感想文コンクール
最優秀作品【低学年の部】

「秋の花」-私と円柴さんｼﾘｰｽﾞより-を読んで

ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科２年　山岸　幸

世の中にはいろいろな人がいる。本を読む人、読まない人。私は読む人に属すが、推理小説は読まない人になる。人が殺されるのが恐ろしい、という情けない理由で読まず嫌いになっていたのだ。私がこの私と円柴さんシリーズを手にしたのも、推理小説とは思わなかったからだ。たまたま開いたその本は、本の名前がどっさり出てきた。

「水を飲むように、本を読む」と言うこのシリーズの主人公”私”のせいで、シリーズ四冊中に出てくる本は軽く百を越す。そして、彼女はその全てに深い観察による感想をしっかりと持っているのだ。そういう”私”の日常的な不思議を、落語家の円柴さんが解く。彼女が落語好きで、円柴さんと知り合ったというのだから、私の推理小説に対する偏見は崩れ去るしかなかった。本の知識と、ユーモアと、なにより、謎は日常のことだから殺人は起こらない。私はすっかりハマッてしまっていた。

そしてシリーズ三作目の「秋の花」、ここまで楽しく一気に読んでいた私は、今度も期待しながら読み始めた。今までは短編ばかりで、これは初めての長編だった。そのことで期待していたし、私のお気に入りである”私”の友達正ちゃんが冒頭から登場していたので、なおさらうれしくなって読んでいた。しかし、わずか十九ページ目で、私は読むんじゃなかったと思った。人の死、がでてきたのである。

それは、”私”の後輩の高校生真理子が、夜の学校の屋上から転落死したという事だった。文化祭の前夜で学校には沢山の人がいたが、状況から自殺か事故だが真相は分からない。この設定で私には十分恐かった。先月、私も初めて文化祭とその準備を体験したばかりだが、準備をしているときの雰囲気は独特のものがあって、どうかすると当日より楽しい気がした。そういう学校で、月明かりの中悲鳴が落ちていく。‥‥恐い、けれどもとにかく私は、大好きな正ちゃんを頼って読み進めていった。

初めは、”私”も身近なところで起こった出来事に驚いているだけだったが、真理子と親友だった利恵は普通の様子ではなくなり、知り合いだった主人公に助けを求めているような行動を見せる。この辺まで来て、読んでいてつらくなってきた。親友を亡くした利恵の悲しみというより苦しみの痛々しさと、それをどうにかしてあげたい”私”達の気持ち。この二つが、もし私が誰か大切な人を亡くしたらどうすればいいのだろう、という問になって私を重い気持ちにさせた。何を見てもその人を思いだしてしまうのが、今の利恵なら、元気になるのはその人を忘れることだろうか。忘れられる程度のことなのだろうか。私たちは、忘れられてしまうのだろうか。

私の解決がつかないまま、やがて真相が円柴さんによって示される。この二人はこっそり垂れ幕を作り文化祭でみんなを驚かせようと試してみているとき、利恵が下で誤って幕を引っ張り、その反動で上の真理子が転落してしまったというものだった。

この部分まで来た時、私はさらにやり切れなくなってしまった。二人の何がいけなかったというのだろう。一瞬で世界が変わったのだ。初めの時とはまったく違う、怖さを私は感じた。人が生きて死ぬというのは、どういうことなのだろう。またこの問を思った。そして、この真相に辿り着く前でさえ、私には、これから先の利恵の生きていく道が分からなかった。それなのに、利恵は自分で悲しむことすら許せなかったのだ。誰が、どうしてあげられるのだろう。

この二つの問にも、円柴さんは答えてくれていた。もろい私達が、今という一つきりの時を生き、何かをしようとするのが大事だと。だからこそ何かが、たとえ存在自体を忘れられても、どこかに永遠に残る気がすると。そして利恵は（最後に利恵は真理子の家に行く）、真理子の親によって救われると言っている。親だから、許すことは出来なくても、救わなければと思う、と。

日常生活している中で、生きていることを思うのは余りない。けれども日常は、生きていることは、とてももろいことだから、難しいし、まだはっきり答えられない問もあるが、人生のもろさを受け入れたうえで、自分から生きたい。そして、私が親になったとき、この結末をどう思うだろうか。もっと別の見方が出来るかもしれない。その時までに、円柴さんの様にしっかりと生きていることを自分で見つめられるようになっていたい。

感想文コンクール
最優秀作品【高学年の部】

「豊かさって、なんですか？」
(John Roger,Peter McWilliams著 Voice社)
を読んで

電気工学科５年　　高橋　亜維

今の時代は、大変豊かであると言われている。欲しいものは、たいていお金を出せば手に入る。それを手に入れた時、人間は満足し、幸せを感じる。しかし、それが本当の豊かさだろうか。豊かになるために毎日毎日自分の身をすり減らして働き、欲しいものを金で手に入れ、また豊かになるために働く。このエンドレスループの中での生活は、本当に豊かと言えるだろうか。

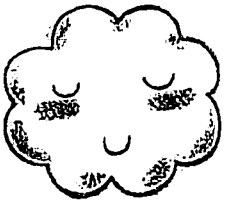
豊かさとは何かを追求しているこの本の一文にはこの様なものがある。「人生において、めざすべきものはふたつ。最初に欲しいものを手に入れること。そしてその後でそれを楽しむこと。人類の中でも、賢い者だけが後者をなしとげられるのだ。」私達人間は、欲しい物がなかなか手に入らない時は、それをなんとしてでも手に入れようと必死になる。例えば、タマゴッチの様に....。しかしそれを一度手にしてしまうとどうだろう。初めは手に入れることのできた満足感で喜びを感じるであろうが、時がたつにつれその感情は弱くなっていき、別な物に目をやり、また他の物を追い求めるのではないだろうか。私達にとって豊かさとは、単なるお金以上のもの、物以上のものなのではないだろうか。

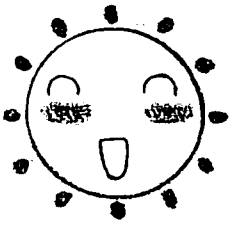
また私は、次の一文を目にした時なるほどと、うなずかずにはいられなかった。それは、「健康なしでは、人生は人生でない。宝とは、健康だ。豊かさとは、健康だ。」というものである。いくらお金を持っていても、いくら新しい大邸宅に住んでいたとしても、毎日ベッドで寝たきりであったら、それは豊かとはほど遠いことであろう。私も体がそれほど強くないためか、この言葉の意味をよく理解することができる。具合が悪い時、何もいらないから、ただ元気になりたいと願う。そして、健康であること、普段当たりまえであることがどれほどすばらしいことなのかを、実感するのだ。お金では買えない健康という宝を、豊かさを改めてこの本は思い出させてくれた。

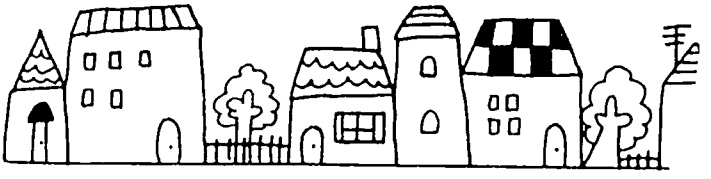
「もし、絶対に人にもらさず、口に出してはいけないという条件つきで、叡知が与えられるとしたら、私はそれを拒否するだろう。何であろうと人と分かち合えないものを持っても、楽しくないからだ。」確かにその通りであろう。私達は、他人から親切にされて幸福を感じる。しかし、他人に親切を示し、その人の笑顔を見た時、さらに大きな幸福を感じないだろうか。それによって自分も豊かにならないだろうか。けれども、私達の若い世代には、この種の豊かさが欠落していると思う。自分さえ良ければいい。他人を傷つけてもかまわない。そんな自己中心的な考えの人が、あまりにも多くはないだろうか。本当の意味での豊かさで言えば、お金はあまり持っていなかったとしても昔の人の方がずっと豊かだっただろう。表面だけの豊かさを求めるのではなく、内面の豊かさを追求する必要を強く感じさせられた。

つまり、豊かさを感じるためには自分の持っている物で満足することが必要ではないだろうか。自分の手に入らないものを求めようと、やっきになると人は心の豊かさを忘れてしまう。心の豊かさなしには、どんなにお金を持っていても豊かだと感じることはできない。お金では買えない健康、そして他人に幸せを与えることによって自分が得ることのできる豊かさこそが、真の意味での豊かさであろう。

最後に、この本の中で私が最も気に入った一文を参照しよう。「小切手帳もなく銀行も持っていないが、私は感謝を表したい。なぜなら、朝には日を、夜には月を持っているから....。」そう、お金が豊かさではないのだ。友人、家族、そして自分が今こうして生きていられること。それだけあれば、私達は本当の豊かさを手に入れることは容易なのである。







【新刊書の紹介】

今回はここで特別に、ある新刊書の紹介をしたいと思う。異例のことであるが、理由は後ほど。まず紹介したい本であるが、それは

「時機すぎた総括　太田憲孝作品集」
太田　憲孝著　髙島書房出版部
(1998年1月10日発行)

「時機すぎた総括」は第４９回福島県文学賞受賞作、そして、作者の太田憲孝氏の経歴には、「1953年、福島県生まれ。福島工業高等専門学校卒業。...」とある。

そう、わが福島高専の卒業生の方である。同窓会名簿によると、工業化学科第９回（昭和５０年３月）の卒業となっていて、建設環境工学科の山ノ内先生と同世代である。

さて、この本には、「蛍の詩」「再会」「時機すぎた総括」「傀儡の絵画」という４作品が収められている。詳しくは読んで頂くとして、受賞作「時機すぎた総括」の内容を紹介しよう。

若い頃学生運動に全力を傾けたＮという男が、自分の死期が間近なのを知り、当時儲けた娘に会いに行くというものである。娘の母親は、学生運動がらみの事故（とはいうものの結局はＮの引き起こした事故）で亡くなり、娘はその母親の実家（福島県Ｋ町）に引き取られた。彼らにとっての孫娘を育ててきた老夫婦は、「Ｎのせいで自分たちの娘は死んだのだ。」と考え、今までＮとの接触を拒んできたから、Ｎは自分の娘とは２０年以上会っていない。それを、自分の死期が近いのを知り、会いに行く。許してもらおうとか、会って何を言おうとか、そんなことは考えずに、もしかしたら老夫婦は会わせてくれないかも知れないが、とにかく会いに行く。そういう内容だ。

私の筆力では、全然感じが伝わってこない。それどころか、何か印象がちがう。表面を追えば、上の通りであるが、やはり感じがちがう。こうなると小説家との描写力の差を強烈に感じてしまう。これ以上書くと、ますます違った印象が入り込むので、これ以上、特に結末は書かないことにしよう。

ここに収載されている４作品とも、掛け値なしに面白いと思う。小説家の目があると感心してしまう。特に「傀儡の絵画」は長編で、若い画家が理不尽な画壇の軋轢がもとで贋作画家になるが...（その結末は？）、というものだが、これが４作品中私が一番好きな作品である。これだけの長編を書くのに、準備といい、執筆といい、どれだけ時間をかけておいでなのだろう、などと思ってしまう。

さて、この作品集を読んで感じたことは、まず「作家の太田氏は、本当に福島高専の卒業生の方だろうか？」ということであった。これは、もちろん悪い意味でなく、純粋に、「この作品集はどうみても文学部出身の作家の目で見た世界だなあ。」という印象が私には強かったからである。理系出身（まあ、文系／理系という分け方に問題があるのは承知の上でこう分けるが）の人の作品は、だいたい分かるものだが、太田氏の作品には、その独特の雰囲気が（私には）感じられない。真に文学作品のイメージである。

「単なる詩人の句は最善とは思えないが、その人がひとたび科学的基礎を知り、その光彩をあびるとき、その詩ははじめてすぐれたものになる。」-----エマーソンの言葉である。

また、画家のデッサン力は凄いものであるときく。子供の絵のような抽象画を描く画家でも、そのデッサン力はすばらしく、下絵のときは写真のように忠実に描いたものが、完成品をみるとそのリアルさはなくなり、絵の具をぬったくったような、その画家独自の絵になっていることも珍しくないという。

つまりは、作品を創るには、たとえ、作品の表面に直接出ることはなくとも、その作家に力と含みがなくてはいけない、ということだと思う。

こうしてみると、理系の知識を十分に持ち、含みとしながらも、それを全く感じさせない太田氏の作品の凄さを考えてしまう。

少し本を読めば、個人的に注目する作家というのが自ずと決まってくるものであるが、私の注目する作家の一人に太田氏が新たに加わったのである。

つい先日（１月末に）図書館長とビブリアの話をしたときに、

「こういう本があるが、それを紹介してはどうか。」と言われた。図書館長や、太田氏をご存じの山ノ内先生と相談した結果、私が紹介文を書くこととなった。本来だったら、国語の先生にお願いすべきであるとも思うが、是非とも今回のビブリアに紹介したかったし、一方ビブリア編集の期限がせまっていたこともあり、結局門外漢の私が書くはめになってしまったのである。　私の感じだけで紹介文を書いたが、内容の面白さなどは全く伝わらないかもしれない。とにかく、一読を薦める次第である。

＜図書館副館長　大槻　正伸＞

卒業生による
「私の推す一冊」

【機械工学科】

１番　荒川　愛
「Ｓａｉｔａ（咲いた）」　水越さくえ著
芝パーク出版
　生活情報誌でファッション、料理、健康、旅行、etc....
１冊にいろいろなことがつまっているお得な雑誌です。

２番　猪狩　正広
「沈黙の巨星　コマツ創業の人・竹内明太郎伝」　北國新聞社出版局
　コマツにしゅうしょくするひとにはぜひ、よんでもらいたい１さつです。
そうぎょうしゃのえいこうやコマツというかいしゃについてもわかり、
とてもためになるのでよんでみよう。

３番　一戸　健人
「ルパン三世（小説）」　モンキーパンチ著
　アニメのルパン三世の小説版でとても読みやすく、内容もわかりやすい。

４番　伊藤　直人
「振動工学入門」　渡辺敏夫 他著　パワー社
　不眠症の方に最適な一冊。１章、５章、６章が私達の素敵な担任の先生の担当。必ず眠れます。（機械工学科の学生は強制購入）

５番　今川　智哲
「Ｓｋｉｐ　スキップ」　北村　薫著　新潮社
　時間のねじれのなかで１７歳の力が２５年の時空を越えて動き出す....。
人生の時間の謎に挑む＜時と人＞の３部作の第１作。

６番　大川原　伸司
「リング」
　あるビデオを見た若者４人が突然死する。そのビデオを解明するために新聞記者がそのビデオを調べる。現実味を帯びた本である。映画館でも上映される予定。かなりこわいです。

７番　大河内　知博
「Ｂｅｒｓｅｒｋ」　三浦　建太郎著　白泉社
　マンガベルセルクの小説版。マンガ・ＴＶと人気の高いこの作品、小説版は、この２つとはまた違った面白さがある。当然ストーリーはオリジナル。さし絵は三浦氏本人で迫力十分。

８番　大平　陽介
「ドラッグ使用前に読む本」　アスペクト出版
（注「↑マジメな本です」と注意書きがあります。--編集部）
　クスリやりたいと思ってる奴は読んどけ。

９番　菅野　由紀恵
「はてしない物語」　ミヒャエル・エンデ著
岩波書店
　映画にもなったネバーエンディングストーリーの原作本。映画を見た人も見ていない人も楽しんで読めます。読みたい人は学校の図書館にもあるので、ぜひ読んでみて下さい。

１０番　草野　達也
「バリバリマシン」　中林著　平和出版社
　バイクの走り屋の本です。俺は走る天然記念物。

１１番　草野　誠
「ウルフ一発ド根性！！」
　サッキー竹田著　千代田出版
　この本は千代の富士を一番間近で見てきた男が苦難の数々を乗り越えていく姿をミステリー小説風に仕上げたもの。突然割り込んでくる挿絵に呆然！　乞うご期待。

１２番　工藤　匠
「ＳＵＲＶＩＶＡＬ　ＢＩＢＬＥ」
　拓植　久慶著　原書房
　危険に出くわす確率が世界有数の低さの日本。そして安全と繁栄を当たり前と考えている日本人。日本の尺度で行動する不用心な我々に足りないモノを与えてくれる一冊である。

１４番　小松　広行
「ＣＡＲ　ＩＮ」
いわきにある中古車販売店にある車が載っています。だから、自分の車が、どれぐらいの価格であるか分かり、参考になると思います。

１５番　坂本　有紀
「ＦＢＩ心理分析官」
ロバート・Ｋ・レスラー著　早川書房
プロファイリングという言葉を、最近耳にする機会が多くなりましたが、この本はその第一人者の方が書いたものです。少々気持ち悪いですが、興味のある方はよんでみましょう。

１６番　里見　真
「入門工業計測」　谷口　修著　実教出版
この本は普段私達が実験などで使用している計測器やその計測で生じる誤差などについて理解しやすく書かれているもので、とても勉強になる一冊です。

１７番　澁谷　和宏
「ＯＰＴＩＯＮ２」　三栄書房
この本は走り屋のバイブル的存在である。内容は、車のチューニングについてが主でその他カッコイイパーツや安上がりドレスアップ等毎月楽しい特集があり車の知識が身につくぞ。

１８番　鈴木　一之
「地球環境報告」　石　弘之著　岩波新書
人類の明日を脅かす砂漠化、森林の消滅、さらには酸性雨、フロンガス、食品の化学汚染....　８０カ国以上を調査した著者が、傷ついた地球の現状を訴える迫真のルポルタージュ。

１９番　鈴木　茂和
「オートパーツ（ａｐ）」　辰巳出版
ストリートからサーキットまで、あらゆるチューニングについての本。これを読めばあなたも黒の１８０ＳＸ（水戸ナンバー）もかもれる...。

２０番　鈴木　匡
「経済学第一歩」　小泉　進著　岩波書店
この本は、これから社会に出るみなさんに経済というものを理解してもらうためのもので、みなさんの勉強のための本です。

２１番　園部　勇二
「あッ！　Ｗｉｎｄｏｗｓ９５」
戸内　順一著　オーム社
この本はＷｉｎｄｏｗｓをあまりよく知らない人、またこれから使い始めようとする人にとってたいへんわかり易く、裏わざものっているのでおすすめできる一品です。

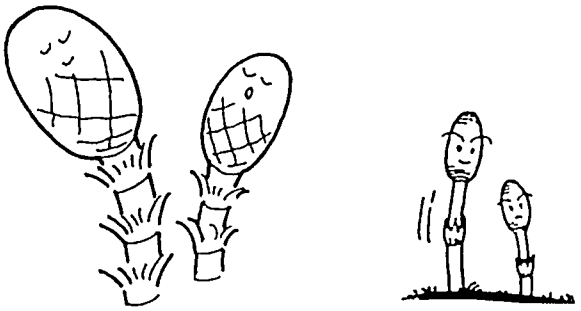
２２番　髙木　一幸
「広辞苑」　新村　出編　岩波書店
本を読んでいてわからない言葉が出てきた時にとても助かる一冊である。ほかので見つからなかった言葉がある人は一度見てみるべきだ。

２３番　髙橋　政博
「のほほん人間革命」　大槻　ケンジ著
著者が人生をのほほんと生きたいがために書いた一冊。サボテンによるトリップ方法などなど。

２４番　髙山　陽介
「一番強いのは誰だ」　山本　小鉄著
歴代レスラーの強さを検証したり、現在一番強いのは誰かを小鉄さんの理論で展開する。他にもアルティメット向きのレスラーは誰か、四天王の誰々の体はなってないなど毒の一冊。

２５番　中山　雄一
「週刊Ｇａｌｌｏｐ」
芹沢　邦雄編　産業経済新聞社
前週の土曜日と日曜日にあったレースの結果や、次週にあるレースの情報など、馬券の検討に欠かせない事がたくさん載っています。

２６番　二階堂　誠
「船木　誠勝のハイブリッド肉体改造法」
船木　誠勝著　ベースボールマガジン社
著者の経験に基づく、ハイブリッドなバディーのつくりかたの指導書。買う時は、いかがわしい本よりもはずかしかった。ビデオもある。



２７番　早川　幸恵
「機械設計（３）」　小熊　正著　パワー社
　めでたく５年に進学するとまっているのは選択科目。設計製図においてエンジンを選択した方ならだれもが手にするこの一冊。エンジンの設計を手取り足取り教えます。ぜひ！

２８番　蛭田　貴弘
「ＨＥＹ！ ＨＥＹ！ ＨＥＹ！ MUSIC CHAMP チャンプトーク集」
発行人：村上光一　株式会社フジテレビ出版
　持っている人もいるかもしれない。ご存じ「ＨＥＹ！ ＨＥＹ！ ＨＥＹ！」の爆笑トーク集である。はっきり言って笑える。特に松山千春のトークはスゴすぎる！
一度お試しあれ。

３０番　松本　紘幸
「電撃プレイステーション」
電撃プレイステーション編集部　主婦の友社
　マニア色豊かな紙面づくりがファミ通より楽しいです。

３１番　水口　有康
「レタリングデザイン」
　　桑山　弥三郎著　グラフィック社
　レタリングの本。レタリングの基本から応用まで細かく書かれている。また、
１８種類もの書体例が掲載されていてこれ一冊でレタリングのすべてを知ることができる。

３２番　緑川　裕
「悪がままに」
　私はこの、「悪がままに」を読み、ＮＢＡの裏側やロッドマンの考えを知ることができ、ＮＢＡにより興味をもちより大好きになりました。続編もあるのでぜひ２冊読んでもらいたい。

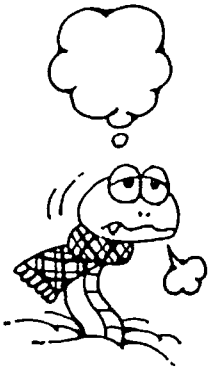
３３番　三村　竜二
「俺」　渡　哲也著
　がん再発！寡黙な男・渡がいま初めて明かす自らの半生、秘話の数々....。
この本には渡哲也の「遺書」ともいうべき覚悟が赤裸々に語られている。渡ファン必見の一冊！！！！！！　君も読め！！

３４番　宗像　智樹
「ダビスタ全書」　成沢　大輔著
　ダビスタをやるなら一おしのこの一冊。初心者から上級者まで幅広く活用できます。この本を参考にすれば超最強馬を出産することも夢ではない。

３５番　若松　英徳
「新版　熱伝達の基礎と演習」
　　萩　三二著　東海大学出版会
　この本は普段私達の身の周りで起こっている熱の現象などから工業における熱の現象まで問題を通してわかりやすく解説してくれる一冊です。

３６番　渡辺　純士
「ボクシングにとりつかれた男」
　　ジョー小泉著　広美出版
　ボクシングというスポーツは、勝者と敗者の差が非常に大きいものだという。その厳しい世界を数々の名勝負をもとに著者が鋭く見つめ、解説している。ファンにはたまらない。

３７番　渡部　武士
「サラブレ」サラブレ編集部　アスキー出版
　競馬のことはもちろんダビスタやその他の競馬ゲームについても詳しく載っている。まさに、競馬三昧の本！！



【電気工学科】

１番　浅野　瑞生
「アンドロイドは電気羊の夢を見るか？」
フィリップ・Ｋ・ディック著　ハヤカワ文庫ＳＦ
本書の著者フィリップ・Ｋ・ディックは人間と機械の決定的な違いは愛と哀れみの心にあるという。道徳観念のない曖昧さを人工的に作った人間で表現し人間性の喪失について多角的なアプローチを試みている。

２番　植　英規
「『思いこみ』の心理」
加藤　諦三著　三笠書房
「悩みがあってこそ自分の人生、欠けたところがあってこそ魅力的」このように考えられる人は少ないだろう。しかし、もしそのように考えることができたら…。自信をなくしそうになったらぜひ。

３番　遠藤　健
「姑獲鳥の夏」　京極　夏彦著　講談社
京極シリーズ第１作です。京極夏彦氏の著者の中で比較的薄い（Ｐ４３０）ので、読んでみて下さい。

４番　大高　裕幸
「杜子春」　芥川　龍之介著　新潮文庫
大金持ちだった杜子春が毎日派手に遊びすぎて貧乏人になってしまうが、仙人によって再び大金持ちになるが遊びすぎてまた貧乏になってしまう。そして、人間に愛想がつきた杜子春が仙人になるためにその仙人と旅にでる話。

５番　岡部　正和
「東京ナイトアウト ①～②.外伝」
川原　つばさ著　角川書店
本編とタイトルは一切関係ありません。３人の高校生の成長物語（笑）です。

６番　小野　友譲
「宇宙皇子」　藤川　柱介著　角川文庫
全巻そろうと５０冊という長編大河幻想小説です。主人公である宇宙皇子の幼少時代からの成長の過程が細やかに描写され、心の葛藤がひしひしと伝わってきます。歴史上の有名人も登場するので、ぜひ読んでみて下さい。

７番　笠間　賢治
「甘えの心理　（愛に出会う時、愛を失う時）」
加藤　諦三著　ＰＨＰ文庫
私はこれですべてを失いました。

８番　櫛田　麻衣
「さぁ 元気になりなさい ①～⑦」
くりこ姫著　新書館
帝国高校及び泉ヶ丘高校（架空です）の２校を舞台に繰り広げられる人間模様（笑）。ちなみに私のおススメは、武田（兄）シリーズです。

９番　甲村　吉行
「図解　死刑物語」
大昔から近代になるまでの世界の処刑の方法を図と文で解析している。時代の流れ、昔の処刑の残虐さを知ることができます。

１０番　小林　正和
「生きるヒント」
これしか読んだことがない。

１１番　小松　敦史
「明け方の夢　（上）（下）」
シドニー・シェルダン著　アカデミー出版
記憶喪失の女性をめぐるサスペンス小説。先の展開が全くわからないので、読み出すとなかなかとまらない。

１２番　榊原　宏美
「ハネムーン」　吉本ばなな著　中央公論社
つかれた心をいやすのには丁度いい。はげしくもなく。しずかでもなく、でもすいこまれていく作品です。加えて表紙もすごくきれい。

１３番　佐藤　暁人
「奥田民生ショウ」
奥田　民生著　ソニーマガジンズ
民生のやる気の無さがにじみ出ててよい。

１４番　佐藤　卓
「聖なる予言」
ジェームズ・レッドフィールド著　角川書店
私の生き方を変えてくれた本。他の人は読んでも面白くないかもしれないが、私の中では一番心に残っている本であり、人生の目標でもある。続編も出ているので、そちらもよろしく。

１５番　佐藤　岳男
「ウォーターワールド」
　映画「ウォーターワールド」の小説。映画を見た人は映像からは感じとれない部分を感じとれるし、見てない人はこの本を読んでから映画を見ると倍楽しめる（と思う）。

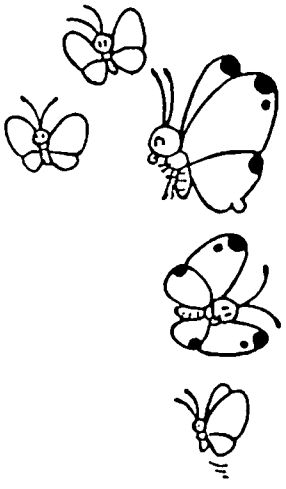
１６番　白土　誠
「就職のための会社案内」　文部省所管財団法人内外学生センター著・出版
　悔いのない就職活動のために、ぜひ。

１７番　鈴木　一馬
「三国志」　横山　光輝著　潮出版社
　昔の中国での魏、呉、蜀の争いを分かりやすく読むことができます。全６０巻、気合いを入れて読むべし！

１８番　高木　雅弘
「空想科学読本　１・２」
　幼い頃に誰もがはまったヒーローの世界を科学の力でぶちこわしてくれる。「大人はいつも子供の夢をこわしてくれる」そんな本です。

１９番　高橋　亜維
「君をわすれない」
　　綾野まさる著　株式会社小学館
　人の命の大切さを改めて実感させられる本です。ぜひ、読んで下さい。

２０番　高橋　大輔
「打たれても出る杭になれ」
秋山　仁・浅井　慎平　他著　ＰＨＰ研究所
　将来、特に就職に対して不安がある人は一度読んでみて下さい。



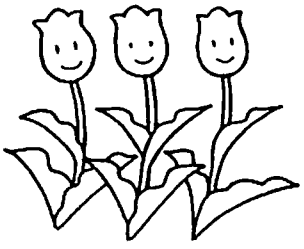
２１番　田代　佑一
「ダウンタウン・ピーな話」
　　大阪ダウンタウン研究会著　鹿砦社
　１８歳未満、４０歳以上、政治家、聖職者、学校の先生、お父さん、お母さん、ならびにダウンタウンのギャグに笑えない人。これらに該当する方は、この本を読まないで下さい。

２２番　新妻　剛
「シンドラーのリスト」
　　トーマス・キニーリー著　新潮社
　二次大戦でドイツ人がユダヤ人を迫害したのは事実ですが、助けた人もいたのです。あのスピルバーグも映画化してます。（映画の方は悲惨シーン在り）

２３番　野崎　智宏
「空想科学読本　２」
　　柳田　理科雄著　宝島社
　昔のヒーローの設定がいかにいい加減かが分かる、ためになる本です。

２４番　古橋　伸互
「野菜の色には理由がある　緑黄色野菜＆トマトの効用」
　　石黒　幸雄・坂本　秀樹著　毎日新聞社
　自然の野菜の色にはとても大切なワケがあります。緑黄色野菜には、成人病予防や、ダイエットによかったりします。二日酔いにはトマトジュースがよかったりなど。また、体においしいトマトメニューなどがのっています。是非、女性の方に読んでいただきたい一冊だと思います。

２５番　星野　功一
「チンギス・ハーン英雄伝 ㊤㊥㊦」
　　赤羽　堯著　光文社
　人間離れした人だと思っていたが、読んでみると村一の勇者の子供であったが父を殺されて、貧しくなってしまい、母と弟たちをはげましながら生活した少年時代、結婚してすぐ妻をうばわれてから取りもどすまでの青年時代。この２つの時代が歴史上最大の領土の国の王になるのに不可欠だったと思った。



２６番　堀川　洋平
「ノルウェーの森」　村上　春樹著　講談社
　村上春樹の大ベストセラー。読み易いのでためしに読んでみては？

２７番　矢内　良樹
「二十四の瞳」　壺井　榮著
　瀬戸内海べりの一寒村に来た、おなご先生と十二人の岬の子供たちの心と心のふれあった物語である。しかも、戦争より、先生と十二人の子供たちの運命が大きく変わっていく物語でもあり、とても感動する作品です。

２８番　山口　雄永
［ＮＩＧＨＴ　ＨＥＡＤ ④」飯田　譲二著
　私は４巻しか読まなかったが、やはり最初から読まなきゃ理解できなくなる。深夜にドラマをやってた頃から見てたが、本よりドラマのほうがいいと思う。

３０番　湯田　寛人
「ゾルゲル法の化学」
作花　済夫著　アグネ承風社
　最近脚光をあびているニューセラミックスのゾル・ゲル法による製法が書いてある。興味のない人は就寝用の本に一冊どうぞ。

３１番　吉田　琴江
「パンダのａｎ　ａｎ」
小泉　今日子著　マガジンハウス出版
　小泉今日子の初のエッセイ本。雑誌の「ａｎ　ａｎ」に連載されていた小話を１冊にまとめた読んでてあきない本です。

３２番　吉成　智和
［ＶＩＲＴＵＡＬ　ＧＩＲＬ」
Amy Thomson著　ハヤカワ文庫
　「マギーに会うことは、あなたの時間とお金に値する」〈アボリジナルＳＦ〉誌。何気ない人間の行動が、アンドロイド「マギー」の目から入る情報として、客観的に描かれている。普段、気づかないようなことを改めて確認するためにも、あなたもマギーに会うべきだ。

３４番　我妻　武広
「チューイングガム」　山田 詠美著 幻冬社
　男女の出会いから結婚までの物語。

３６番　シャフル ニザム
「電気公式活用ポケットブック」
山口　修廣著　オーム社
　この本は便利だ。小さくて持ちやすい。内容は詳しく書いてあります。教科書と併用できる。

【工業化学科】

２番　飯田　賢太郎
「幽霊列車」赤川　次郎著　文春文庫
　「三毛猫ホームズ」シリーズなどでおなじみの人気作家、赤川次郎の処女作です。この本を読まずして赤川次郎は語れない！と断言できるほどのけっさくですので古本等でも良いのでぜひ読んでみて下さい。面白さは私が保証します。

４番　石井　忍
「姑獲鳥の夏」　講談社ノベルス
　「二十箇月もの間身籠もっている女性が居るらしい」三文文士の関口がこの噂を古書店を営む友人京極堂に話したのをきっかけに、探偵榎木津、刑事木場を巻き込んで噂の真相とそれに付随する事件の解決にのりだす推理小説。

６番　大谷　亮
「エンドレスピーク--はるかな嶺--」(上、下)
森村　誠一著　角川春樹事務所
　太平洋戦争は友情で結ばれた５人の学生を引き離す。５人は槍ケ岳で、ここでの再会を誓い５つの石を分けあった。敵味方に別れ戦う５人の運命は、不思議に絡み合っていく。戦争を知らない若い世代にお勧め。

７番　桂　正紘
「ＪＲ　時刻表」　弘済出版社
　旅というものはいいものです。特にぶらり旅というものは、そのふるさとならではのものが伝わってきます。そんな旅のお友の参考書、いかがですか‥?豊富な内容でいっぱいですよ。

１８番　菅波　有人
「失敗例から解く分析実践シリーズ　吸光光度法の実際」高田　芳矩著　講談社
　「失敗と工夫のくり返しによって我々の技術はゆるみなく進歩しつづける」。新しいことをはじめるとき、だれでも一度は失敗するだろう。しかし、失敗から事が始まることのほうがとてつもなく多いのである。

２０番　鈴木　明
「ＣＭをにぎわしたヒット商品　～その化学的カラクリと開発の舞台裏～」　化学同人
　例えば、アロンアルファがなぜ接着するのか、どのように開発され、改良されていったのかなど、全３５品目について書かれている。化学の面白さがわかる本。
特に物質工学科の人におすすめ。

２５番　中澤　歩
「失敗例から解く分析実践シリーズ　吸光光度法の実際」髙田　芳矩著　講談社
　学生時代の内田先生と出あえる一冊。着眼点は主に初歩的な事で文章もかなり易しい。ただし、本当の意味で「読める」のは学生のうちだけという生もののような本。ぜひ限定期間内に一読を。

２９番　服部　一真
「サラマンダー懺悔」（上、下）
梶尾　真治著　ソノラマ文庫
　最後まで読んでいくうちにテロ集団というものが少し分かるかも...？！

３６番　渡邊　邦幸
「痕　～きずあと～」　髙橋　龍也著
　人は一人では生きていけない.....
生まれ落ちた時から人は周りに居る人々との間に意識しても意識しなくても次々と”縁”を結んでいく。結ばれた”縁”は、強く結びつくこともあれば、弱くすぐ切れてしまうようなこともあり、それが好意的な離れがたく思うものであれば、”絆”とよばれ、逆の場合には”因縁”と呼ばれる。それはどちらも人を束縛し、その生き方を決める要因となる。
　本当に自由な人などいない。
人は、自由と交換に、自分とは違う個体---他人---と縁を、”絆”を結んでいかなければならないからだ。そして、喜びも悲しみも、自由も不自由も、愛することも憎むことも、全て人と人との縁があってこそ感じられる感情だから、人は人であり続けたいと願うだろう。”絆”という名の鎖に繋がれることを好しとするだろう。

無人島に流れ着いた人でさえ、
かつての人々との繋がりを思う時があるなら、
それは絆を持っているという。
たとえ人でない普通の動物でも、
親子の絆‥‥そういうものを持っている。
絆を持たないのは、人でも動物でもない。
それは”鬼”だ。
最も強い生物、殺戮を愉しみ自分の快楽のみを求めそして、独りであることを望み、”絆”を必要としないもの、
夜の闇に潜む高貴で孤高の獣。
一切の絆を断ち切った、真に自由なもの、それが”鬼”

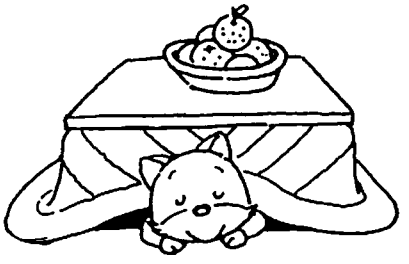
人としての生き方、鬼としての生き方、
絆に繋がれた不自由、絆を持たない自由
あなたならどちらを選ぶのか.....
だから”絆”を結ぶのだ。人が、人であり続けたい、そう思う限り。」

このノベルは絆を失うことによって心に深い痕～きずあと～を負った四姉妹を、絆が切れてしまったと思い込んでいる主人公がいやしていくという物語です。
　この作品にふれたことで人生---人の生き方---を考え、実際に変わったと思うほどすばらしいです。

【土木工学科】

１番　赤間　隆広
「水が無い」　志賀著　志賀文庫
　福岡県で起こった水不足に対し、市民が苦悩した３６５日の日々について。

２番　阿部　良孝
「つい誰かに話したくなる雑学の本」
講談社＋α文庫
　ふだん見過ごしていることはたくさんあるものですが、身の回りや心と体のことから歴史・科学の話のタネがギッシリ詰まったこの本を読めば気分もスッキリです。



３番　池田　高志
「銀河鉄道の夜」　宮澤　賢治著　集英社
　「銀河鉄道の夜」だけだと思ったら昔なつかしい「よだかの星」ものってあった。

４番　大平　育男
「公務員の哲学」
　公務員とは、江戸時代の武士階級に同じである。一度不祥事を起こせば、国民に腹かっさばいてお詫びせねばならない。とか私が書くと、「嘘つき」とか言われる訳だ。不本意だな。

５番　大平　誠一郎
「スウィートホーム殺人事件」
　ビートルズを聞きながら読んでいたのでほのぼのとした殺人事件のように思えた作品です。

６番　片寄　允広
「戦艦武蔵の最後」　渡辺　清著　童心社
　第二次世界大戦の時日本の大型戦艦の武蔵についての本当の話です。一少年水兵の目からとらえた武蔵の最後は戦争の本質をとらえています。本書から人間の命の尊さと平和の願いを改めて思わされる作品でした。

７番　菊池　卓郎
「ＴＨＥ　ＢＩＢＬＥ　ＣＯＤＥ」
　　マイケル・ドロズニン著　新潮社
　ニュートンも研究したという、暗号解読の世界へひたれる一冊。

１０番　木田　晶広
「俺節」　土田　世紀著　小学館
　演歌のロマンチズムが一つになるけっさく。

１１番　木村　孝範
「サンクチュアリ」　史村　翔著　小学館
　高齢化した日本の国会議員の古い政治に若い２人が勇敢に立ち向かい.....？
はっきりいっていいですよ----！！
深いですね　-------！

１２番　郡　譲
「愚痴」　アルベルト・ユズギス著
　　ブルース・コーポレーション刊
　苦難にとんだ一人のサディストのふと思った無益な思いを書きつづった詩集。

１３番　小松　広季
「マネー犯罪」
　自分がやられたらかんたんにだまされると思う。だれにでもできるマネー犯罪のやり方がかいてある。

１４番　佐藤　知典
「森が消えれば海も死ぬ」　松永　勝彦著
　　ＢＬＵＥ　ＢＡＣＫＳ
　昔から漁民たちは海の魚介類を増やすためには湖岸、川辺、海岸の森林を守ることが大切だとよく知っていました。陸と海を結ぶ生態学について紹介しています。

１５番　佐藤　恵
「無印良女」　群　ようこ著　角川文庫
　著者が実際に体験したことや思ったことを書いたエッセイです。一話２０ページ程度なので、すぐ読書にあきてしまう人などにオススメの一冊です。

１６番　佐藤　佳恭
「チャイルド プラネット」
　　竹熊　健太郎、永福　一成著　小学館
　原因不明のウィルスが....読めばわかるよ。

１７番　志賀　康
「赤色エレジー」　林　静一著　青林堂
　これは最高の愛のはなし。何度読み返したかわからない。これは最高の愛のはなし。

１８番　澁谷　健二
「深い河」　遠藤　周作著
　インドツアーを舞台に登場人物の心情風景を描いた作品。なんか最近ありがちな（？）消化不良な終り方で納得いかなかったけど、とりあえず暇なら読んで下さいな。

２１番　鈴木　千尋
「智恵子抄」　高村　光太郎著　新潮文庫
　智恵子を愛した光太郎が、智恵子の死後もなお募る思いを歌った愛の詩集。愛ってスバラシイと感じる一冊です。

２２番　関場　浩平
「三毛猫ホームズの推理」
　　赤川　次郎著　角川文庫
　タイトルにも入っているように、ある事件で刑事に飼われるようになったホームズという三毛猫とその刑事の活躍を描いたものである。推理小説ではあるが、読みやすく、ストーリーも分かりやすい。なにより、キャラクターの面白さが群を抜いている。
　現在、角川文庫からは２０冊出版されてい

るが、オススメとしては「三毛猫ホームズの狂詩曲（ラプソディー）」やヨーロッパを旅する「三毛猫ホームズの騎士道」～「三毛猫ホームズの登山列車」が挙げられる。

２３番　高橋　恵美
「つれづれノート①～③」　銀色　夏生著
　日常生活の日記ですが読んでいくうちにはまっていきます。

２４番　高橋　幸平
「Ｎｕｍｂｅｒ」
永井　洋一他多数　文芸春秋社
スポーツファンならこの一冊。
写真家を目指す人にもこの一冊。
授業中に読むならこの一冊。

２７番　布施　光弘
「Ｂ－Ｂ」　石渡　治著　小学館
　ボクシングの熱い本。森山とＢＢの最後の戦いは必見。

２９番　本間　大介
「ねこたま」
　小林　めぐみ著　富士見ファンタジア文庫
　「ねこたま」という変な題名ではありますがなかなか読みやすい本です。本屋などで見かけたら買ってみても損にはならないと思います。

３０番　松本　大輔
「パクリの手口」
　裏経済のマルチ商法や、取り込みさぎ等、事件師や街金、情報屋等の仕事をわかり易く解説してあり、不動産と銀行の関わり合いによる、今に至る金融機関がいかに好景気時に土地に執着していたかがわかる。今日の山一証券の不祥事、何故、ここまで景気が傾いたかの少々の原因はわかるかも。また、働き口が無くなった時の再就職の手がかりにも。

３１番　柳井　理香
「アルジャーノンに花束を」
ダニエル・キイス著　早川書房
　この本は精神障害者の主人公が手術によって天才となるが同じ手術を受けたネズミを見て、自分の行く末を知るという話が日記形式に書かれた感動話です。

３２番　矢萩　あゆみ
「麻意ね、死ぬのがこわいの」
石黒　美佐子著　立風書房
　この本は、白血病にかかった少女のお話を母親が書いたものです。４歳の時に発病し、３ヶ月の命と言われたが、家族の看病の中で発病から３年間生きた記録です。

３３番　吉田　壮一
「ギルバート・グレイプ」
　知的障害をもつアニーとその家族との家族愛をえがいた作品で、ビデオにもあるのでみて下さい。レオナルド・ディカプリオがでてるよ。

３４番　吉田　勇次
「隣人１３号」（全三巻）　井上　三太著
　二重人格者の話でかなりおもしろいことうけあい。なかなか売ってないので見つけたら即Ｇｅｔです。

３５番　渡辺　亜紀子
「ブラッディマリーをもう一度」
喜多嶋　隆著
　恋愛小説。ロマンティックというよりもかっこいい恋愛というかんじ。
女性にぜひ読んでもらいたい。

３６番　渡辺　美穂
「つれづれノート　④～⑥」　銀色　夏生著
　好きなときに寝て、おいしいものを食べ、いろんなところに旅行に行ってるこの作者がホントにうらやましいです。

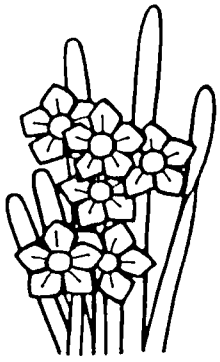
図書館便り

☆学年学科別図書帯出冊数（平成９年４月～１２月）

学　年	1年	2年	3年	4年	5年	合　計
機械工学科	3	74	281	120	123	601
電気工学科	10	59	359	190	149	767
物質工学科	68	71				1134
工業化学科			603	277	115	
建設環境工学科	7	100	121			432
土木工学科				44	160	
ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科	70	101	79	251		501
合　計	158	405	1443	882	547	3435

☆図書貸し出し冊数ベスト１０（平成９年４月～１２月）

1	村山　英司	（工業化学科３年）	１４５冊
2	服部　直明	（工業化学科３年）	５０冊
3	鈴木　友美	（工業化学科３年）	４６冊
4	遠藤　健太郎	（電気工学科４年）	４５冊
5	吉成　悦子	（工業化学科３年）	４４冊
6	赤津　久美子	（工業化学科３年）	３６冊
7	高橋　亜維	（電気工学科５年）	３３冊
〃	堀越　あゆみ	（物質工学科１年）	３３冊
〃	森田　千絵	（コミ情学科２年）	３３冊



☆　平成９年度　感想文コンクール応募作品

◎ は最優秀作品　　○ は優秀作品

【低学年の部】

◎「秋の花」　-私と円柴さんｼﾘｰｽﾞより-　を読んで　ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科２年　山岸　幸
○「老人と海」を読んで　ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科２年　芳賀　敦子
○「クリスマスキャロル」を読んで　ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科２年　森田　千絵
○「ポプラの秋」の感想　建設環境工学科２年　渡部　真規子
○「おしまいの日」を読んで　工業化学科３年　渡辺　ムツ子

【高学年の部】

○「飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ」（井村和清著　祥伝社）を読んで
ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科４年　大島　優佳
○「鍵」（筒井康隆著、角川ホラー文庫）を読んで　ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科４年　箱崎　沙織
◎「豊かさって、なんですか？」（John Roger,Peter McWilliams著 Voice社）を読んで　電気工学科５年　高橋　亜維

お知らせ

★★学年末休業特別貸出について★★

下記のとおり実施します

特別貸出開始	・・・平成１０年３月　２日（月）
貸出限度冊数	・・・一人５冊まで
返却期限	・・・平成１０年４月１０日（金）

★★閉館のお知らせ★★

学年末休業期間中

平成１０年３月１０日（火）～平成１０年４月６日（月）

は閉館いたします。

★★その他★★

○現在帯出している図書で引き続き必要な場合は、カウンターで継続手続きを行って下さい。
また一人で長期間独占しないよう期日には必ず返却して下さい。

★★　５年生全員へのお知らせ　★★

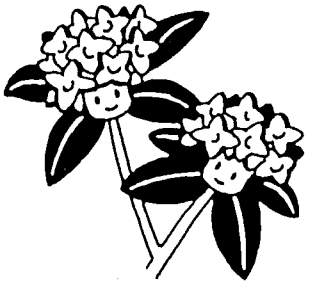
帯出図書・卒業研究用帯出図書を

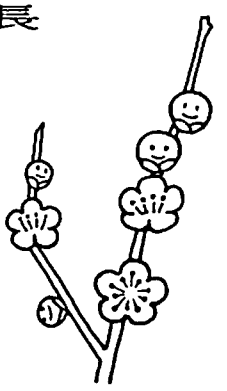
２月２０日（金）までに

返却して下さい。

○期日までに返却できない場合は、その旨を図書係に連絡して下さい。
なお、連絡がないときは、保護者あるいは保証人に督促状を発送する予定です。

図書館長





平成９年度図書委員会

図書館長　　井上　和人（工業化学科）
副館長　（ビブリア担当）　大槻　正伸（電気工学科）

委員　八木　康雄（機械工学科）　　村田　進（電気工学科）
小林　靖明（物質工学科）　　高橋　邦雄（建設環境工学科）
布施　雅彦（ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科）　大森　房子（一般教科）
岡部　久雄（庶務課長）　　黒田　祐一（図書係長）
大谷　敦子（司書）　　薄井　久美子（図書係）

学生図書委員

５Ｍ	早川 幸恵	５Ｅ	吉成 智和	５Ｃ	渡邊 邦幸	５土	澁谷 健二
			笠 純子				鈴木 隆裕
４Ｍ	秋元 一志	４Ｅ	石井 宣幸	４Ｃ	成田 圭介	４土	瀧澤 聖
	山崎 健司		渡辺 剛史		渡邊 幸次		箱崎 寿幸
４コ	*大島 優佳						
	*小関 祥子						
３Ｍ	鎌田 清貴	３Ｅ	芳賀 和美	３Ｃ	加藤 誠子	３建	*磯上 幹夫
	高橋 輝圭		緑川 健志		村山 英司		
３コ	佐藤 拓						
	松本 智明						
２Ｍ	助川 昌弘	２Ｅ	赤津 直人	２物	小野 弘恵	２建	五十嵐 義明
	山下 真樹		馬目 高志		中柴 美希		*渡部 真規子
２コ	森田 千絵						
	山岸 幸						
１Ｍ	安藤 幸一	１Ｅ	雲藤 健	１物	*堀江 大心	１建	三瓶 美穂
	志賀 敬之		根本 良男		堀越 あゆみ		我妻 高大
１コ	*高橋 康孝						
	千代 理絵						

（＊印はビブリア編集委員）

編集後記

図書館便りの図書帯出冊数を見て下さい。なんだか淋しい数字ですね。低学年生は特に、もっと図書館の利用のしかたを覚えて下さい。図書館の利用というのは将来の勉強にも必ず役立つと思いますよ。

もし図書館に行きにくい点があるとか、この本を買ってほしいという要望があるとか、そういう場合は、遠慮せずに図書係に申し出て下さい。

さて、今年も、もう学年末です。今年度の５年生による本の紹介。各クラスにおまかせしました。ほとんど全員が少しずつ書いたクラスも、希望者だけが書いたクラスもありました。卒研等で忙しい中とりまとめてくれた図書委員の諸君、御苦労様でした。

それから感想文コンクール。今年は８編の応募がありましたが、全て女子学生でした。男子学生も是非応募して下さい。特に春のいい季節の長期休業。読書と思索にはいいですね。この学生の特権を使っていい本を読んでみてはいかがでしょうか。